奈良教育大学紀要　第42巻 第1号（人文・社会）平成5年
Bull. Nara Univ. Educ., Vol. 42, No. 1 (Cult. & Soc.). 1993

日本と台湾における絵本の望ましい読み聞かせ方法に関する比較

今井靖親・廖　小　慧*・　中村年江
（奈良教育大学心理学教室）　（神戸女子大学後期博士課程）

（平成5年4月31日受理）

問　題

幼児と絵本との最初の出会いは、幼児自身が絵本を手にして、そこに印刷された文字を読むというような読書形態においてではなく、親や保育者による文章の「読み聞かせ」という場において初めて実現される。すなわち、絵本の「読み聞かせ」は、通常の読書のように、本に印刷された文章を、自らが読むこととも、また、「語り聞かせ」のように、大人の語る「お話」を、子どもが耳で聞くこととも異なった言語活動である。それは、大人と子どもとの親密な人間関係を基盤として、文字で書かれた文章を大人が音読し、子どもは本に描かれた絵を見ながら、耳で音読を聞くという独特のメカニズムをもっている。

では、絵本の読み聞かせには、幼児にとって、どのような教育的意義があると考えられているのであろうか。まず、日本における従来の絵本に関する心理学的研究を中心に調べてみたところ、おおよそ次の3点にまとめることができた。

(1) 想像力を育む　本田（1980）は、幼児は絵とことばによって表現された世界に出会うことで、実在を超えたイメージの世界を楽しめるようになる、と述べている。佐々木（1975）は、絵本から得るものとして、創造的想像力、美しいものを発見する感動、空想の世界に遊ぶことの楽しさ、さまざまな人間的感情の広がりと深さの経験をあげている。そして、優れた絵本は、知識を「既製のまま」に注入するのではなく、そのプロセスである「想像すること、考えること」の力を養っていくものである点を強調している。

(2) 言語能力を高める　阪本（1974）は、絵本を読書への入門として重要視し、就学前より小学校低学年までの児童に対する読書指導を絵本を中心として行うことを提唱している。漢那（1979）は、10か月間、小学校1年生に、毎週1回絵本の読み聞かせを行い、読み聞かせ群が非読み聞かせ群よりも、読書力が有意に伸びたことを報告している。山本（1990）は、幼稚園年長児に、1年間、特に計画的に読み聞かせを行った結果、読み聞かせを普通に行った子どもたちと比較して、「作話テスト」において、優れた成績が得られたことを見出している。

(3) 人間関係を豊かにする　絵本の製作者である松居（1973）は、自分が母親から本を読み聞かせてもらった経験、我が子に読み聞かせを行った経験から、親と子が一つの物語世界を共有する経験を重視している。また、絵本作家の赤羽（1986）は、母の読み聞かせは、子守歌に代わるものであり、母と共にいる安心感と心地良い響きが子どもと母親を密接に結びつける重要な要素

* 現在は中華民国台湾省台南市

であることを指摘している。佐々木（1990）は、絵本の世界はそれを読み聞かせる大人と子どもの想像力によって成立するとし、そのために、絵をとおして子どもの側の経験を呼び起こし、それが足りない時は、さまざまなはたらきかけ―歌を歌ったり、ジェスチャーを入れたり、文章の語り口を工夫したり、表情をつけ加えたりーを行うことの必要性を訴えている。

次に、乳幼児の保育の場である幼稚園や保育所では、絵本は、どのように扱われているのであろうか。まず、幼稚園について見てみよう。平成4年度に改訂されたばかりの「幼稚園教育要領」において、「言葉」の領域の「ねらい」（3）に、「絵本や物語などに親しみ、想像力を豊かにする」とあり、さらに「内容」（9）に、「絵本や物語に親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」という記述がある。「言葉」の領域における「ねらい」は全部で3項目、「内容」は全部で10項目あり、この中に絵本に関する記述がなされている。この事実を考慮すると、今日の幼稚園教育においては、幼児が絵本に接することの重要性は、一応認識されていると言えるのではないか。

これに対し、保育所では、やはり平成4年度に改訂された「保育所保育指針」の「ねらい」・「内容」・「配慮事項」の中で、子どもの発達に応じて、1歳3か月～2歳未満児、3歳児、4歳児、5歳児、6歳児と分けて、絵本の扱い方が、きめ細かく記述されている。全部を紹介すると長くなるので、その中の5歳児のみについて例示する（カッコ内の数字は、それぞれの項目におけるナンバーを示す）。

5歳児

「ねらい」(13)：絵本、童話、視聴覚教材などを見たり聞いたりして、その内容や面白さを楽しみ、イメージが豊かになる。

「内容」（言葉（6））：絵本、童話などに親しみ、その面白さが分かって、想像して楽しむ。

「配慮事項」（言葉（2））：絵本などを使い、想像力が伸びるように配慮する。また、文字については、日常生活や遊びの中で興味を持つようにする。

このように、日本の幼児教育についての基本的な理念を示していると考えられる「幼稚園教育要領」と「保育所指針」においては、絵本の役割は、これを「見たり聞いたり」することによって、(1)内容の面白さ、言葉の模倣を楽しむ、(2)絵や物語を理解する、(3)想像力を伸ばす、(4)言葉を豊かにすることに重点が置かれている。しかし、前述した絵本を媒介とした読み手（大人）と聞き手（子ども）の心の交流や、登場人物の心情を感じることなどの重要性については教育要領にも、保育所指針にも全く触れられていない。

一方、台湾では、許興仁（1981）が、幼稚園や保育所で幼児が、話したり、聞いたりする言語能力を身につけることの重要性を説き、特に絵本などの読み聞かせは、子どもの言語能力を高め、想像力を豊かにし、人格成長にもたいへん役立つことを強調している。呉幸玲（1990）は、読み聞かせによって、自己の認識が深められ、問題解決の方法や行動する勇気を学ぶことの意義を指摘している。また、黄美湄（1991）は、母親が子どもに本を読んでやることの長所として、視野を広げる、読書習慣を培う、良い趣味を養うなどのほか、親と子どもとが一緒に本の楽しさを味わう「親子共読」の重要性をあげている。秦栄華（1992）も、読み聞かせによる子どもとの親密関係の深まりを重視するが、それ以外にも認識能力や言語能力の発達や文字によって表現される世界を発見することの意義に注目している。

ところで、中村（1991）は、過去10年間に「読書科学」と「教育心理学研究」に発表された、絵本の読み聞かせに関する論文と、国語教育における読み聞かせに関する指導書等を調べ、絵本

の読み聞かせに関する重要な変数とそれら相互の関連性を明らかにしている。それらは、①絵本に関する変数、②読み手に関する変数、③聞き手に関する変数、④絵本と読み手の両方にかかわる変数、⑤読み手と聞き手の両方にかかわる変数、⑥絵本と聞き手の両方にかかわる変数、⑦絵本・読み手・聞き手の三者にかかわる変数である。このうち、本研究が関心を向けているのは、②の読み手、すなわち母親や保育者に関する変数である。これらには、読み聞かせの技能としての発声、表現力、態度、本の提示の仕方などのほか、読み手自身の絵本に対する理解度、子どもの発達や行動特徴についての理解度などが含まれる。中村（1991）は、読み手の要因については、国語教育や保育実践の立場から、その重要性を強調した論文は少なくないが（たとえば、依田、1982；佐々木、1990）、従来の心理学的研究には読み手自身の変数について検討したものは見当たらないと報告している。

台湾においても同様に、教育実践や言語教育などの立場から、たとえば、任晟蓀（1985）は、①絵本選択における教育性、啓発性等、②朗読における声の抑揚、発声の明瞭さ、速度、平易な言葉などの他、③物語内容を子どもに応じて整理して伝えること、④中国人の人名を用いること、⑤表情や動きを豊かにすること、⑥本の操作に配慮すること、⑦ハッピー・エンドの物語にすることなどを提示し、また、前述の黄美湄（1991）は、①子どもの特性や年齢に適した絵本を選択すること、②子どもたちの座り方を工夫すること、③絵本についての環境を構成すること、④読み聞かせの途中で質問を挟まないこと、などを挙げている。しかしながら、台湾の大学紀要などを調べた限りでは、望ましい絵本の読み聞かせ条件について、心理学の立場から実証的に研究したものは見当たらなかった。

中村（1991）は、幼稚園、保育園の保育者と、短大で保育を専攻する学生を対象に、絵本の望ましい読み聞かせ条件を明らかにする目的で調査を行い、得られた資料から因子分析法によって、それぞれ5つの因子を抽出している。そこで、本研究では、中村（1991）に従って、台湾における絵本の望ましい読み聞かせ条件を明らかにし、両国の結果について比較検討を行う。

方　　法

〈対象者〉

本研究の日本における資料は中村（1991）のものを用いた。したがって、対象者は、京都府・大阪府・奈良県の幼稚園・保育所の保育実践者100名であった。また、台湾の対象者は、中華民國台湾省台南市の幼稚園・保育所における保育実践者100名であった。

〈調査内容〉

中村（1991）では、絵本の望ましい読み聞かせの条件を測定するために、幼児言語研究会（1977）や依田（1982）などにおいて指摘されている望ましい読み聞かせの方法を参考にして、31項目よりなる調査項目が選定された（表1参照）。台湾では、これをさらに中國語（北京語）に翻訳したものを用いた（表2参照）。

〈材　料〉

上記の質問項目を印刷した5件法からなる調査用紙

〈調査期間〉

日本：1990年6月27日～7月10日

台湾：1992年6月20日～7月30日

表1．絵本の望ましい読み聞かせ方法に関する調査用紙（日本）

所属（幼稚園・保育園・大学）　年齢　歳代

記入年月日　平成　年　月　日（　）

この調査は、おとなと幼児の1対1の場面における絵本の読み関かせの望ましい条件について質問したものです。各質問項目ごとに、絵本を読み関かせる場合に重要だと思う程度を選び、その番号を○で囲んでください。

	重要度				
1．文は、子どもの年齢や発達に合った絵本を選んで読み関かせる。	1	2	3	4	5
2．子ども達が絵本を読んでもらうという気持ちになれるような環境を整える。	1	2	3	4	5
3．読み関かせの内容に期待や緊張感を持たせるようにする。	1	2	3	4	5
4．絵が見やすく、話が聞きやすいように座り方を工夫する。	1	2	3	4	5
5．子どもの気持ちを散らす事物や音のない部屋を選ぶ。	1	2	3	4	5
6．絵は、子どもの気がすむまで見せる。	1	2	3	4	5
7．ページをめくる時に、読み関かせがプツンと切れないように気をつける。	1	2	3	4	5
8．絵本の位置は、肩から胸のあたりにする。	1	2	3	4	5
9．絵本がぐらつかないように、常に安定した持ち方をする。	1	2	3	4	5
10．ページをめくる時は、手や指で隠さないように注意する。	1	2	3	4	5
11．絵本の開きが悪くならないように、十分に絵本の開きぐせをつけておく。	1	2	3	4	5
12．子どもから、絵本が見えるように置き方を工夫する。	1	2	3	4	5
13．時々、子どもにまなざしを向けながら読み開かせる。	1	2	3	4	5
14．自然な気持で読み聞かせる。	1	2	3	4	5
15．子どもの表情の動きに気を配りながら読み聞かせる。	1	2	3	4	5
16．子どもに語りかせるように読み聞かせる。	1	2	3	4	5
17．良い役者になったつもりで読み聞かせる。	1	2	3	4	5
18．字のないページが出てきた時には、つなぎとして話しかけを行う。	1	2	3	4	5
19．絵本の文章をよく覚えて読み聞かせる。	1	2	3	4	5
20．読む速度は、速くなりすぎないように留意する。	1	2	3	4	5
21．話の内容や流れによって、その読む速度・めくる速度に変化を持たせる。	1	2	3	4	5
22．明瞭な発音で読み聞かせる。	1	2	3	4	5
23．ほど良い間をとって読み聞かせる。	1	2	3	4	5
24．文中の言葉の説明ばかりをしないようにする。	1	2	3	4	5
25．正常な声で、普通に読み聞かせる。	1	2	3	4	5
26．登場人物のせりふが出てくる時は、多少声色を使って読み聞かせる。	1	2	3	4	5
27．ページをめくって、すぐに文章を読まないで、絵を見る時間を与える。	1	2	3	4	5
28．物語絵本を読み聞かせの途中、質問等をはさんで物語の流れを中断しないようにする。	1	2	3	4	5
29．子ども自身の感動を大切にし、読後、むやみに感想を聞かない。	1	2	3	4	5
30．読み聞かせ中の子どもの語りかけには、しっかりと応答してあげる。	1	2	3	4	5
31．物語に関連づけられた幼児の発言を大切にする。	1	2	3	4	5

御協力ありがとうございました。31問全てに、1つずつ○がついているかどうかを確かめてください。

表2．絵本の望ましい読み聞かせ方法に関する調査用紙（台湾）

所屬（幼稚園、保育園、高職）　　年齢＿＿＿歳

記入年月日＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

這是一份當大人和幼兒一對一講故事時，如何向幼兒說故事的問卷調查，以下的情形，請選擇其重要程度將號碼圈下，謝謝！

	重要度				
1．選擇適合幼兒的年齡及發想的文章。	1	2	3	4	5
2．設置讓幼兒有想聽故事的環境。	1	2	3	4	5
3．講故事的時候，讓幼兒有期待及緊張的感覺。	1	2	3	4	5
4．要考慮幼兒容易看得到、聽得到的座位方式。	1	2	3	4	5
5．選擇不會分散幼兒的情緒，沒有雜物、雜音的房間。	1	2	3	4	5
6．畫要讓孩子看到滿意爲止。	1	2	3	4	5
7．將飜開下一頁時，不停頓講故事，注意故事內容的銜接。	1	2	3	4	5
8．畫本的放置位置在肩膀到胸前之前。	1	2	3	4	5
9．時常注意畫册的握持法，不要使它搖晃。	1	2	3	4	5
10．飜頁時，注意自己的手指，不要遮住畫面。	1	2	3	4	5
11．爲了防止飜頁困難，講故事之前要注意書頁的裝訂不良點。	1	2	3	4	5
12．講故事時，注意將畫本放置在幼兒看到的位置。	1	2	3	4	5
13．講故事時，眼光經常環視著幼兒。	1	2	3	4	5
14．用自然的情緒講故事。	1	2	3	4	5
15．配合幼兒的表情變化講故事。	1	2	3	4	5
16．像在對幼兒交談的方式講故事。	1	2	3	4	5
17．抱著演說家的角色，講故事給幼兒聽。	1	2	3	4	5
18．遇到沒有文字的頁面時，也能連接故事內容。	1	2	3	4	5
19．將畫本的內容熟記之後，才講故事給幼兒聽。	1	2	3	4	5
20．經常注意講故事的速度不會太快。	1	2	3	4	5
21．講故事的速度及掀畫本的速度要根據故事的內容進展隨之變化。	1	2	3	4	5
22．用正確的發音講故事。	1	2	3	4	5
23．講故事的時，適當的將間隔取好。	1	2	3	4	5
24．不一致的解釋內容中的詞語。	1	2	3	4	5
25．用適當的聲音講故事。	1	2	3	4	5
26．用據角色不同，聲音也隨著變化。	1	2	3	4	5
27．飜開下一頁時不馬上說內容，而是先讓幼兒看畫。	1	2	3	4	5
28．講故事的過程中，提出問題時應注意不中斷內容。	1	2	3	4	5
29．爲了尊重幼兒自身的感受講完故事之後不隨便問感想。	1	2	3	4	5
30．在講故事時幼兒突然挿入問話時應適當給予回答。	1	2	3	4	5
31．當幼兒針對故事內容提出問題時不可置之不理。	1	2	3	4	5

非常謝謝您的合作，講再確認一下是否將31．個題目完全做完了。

〈手続き〉

日本：予め調査への協力を依頼してあった各幼稚園・保育所宛に、調査用紙と記入方法を郵送し、回答用紙をまとめて返送してもらった。

台湾：本研究の第二著者が、各幼稚園・保育所に行き、調査用紙を配布し、回答を記入するように依頼した。回答用紙は数日後に回収した。

調査用紙への記入の仕方：各項目ごとに、絵本の読み聞かせ方法として本人が望ましいと考える程度によって、5段階評定を行い、1～5の数字を○で囲む。

結果と考察

1．因子分析にもとづく検討

まず、絵本の望ましい読み聞かせの条件についての調査項目が、心理的にどのような意味内容を持っているかを検討するために、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。さらに、因子数を定め、各因子の負荷量が、0.40以上の項目をそれぞれの因子の代表として採用した。その結果、日本・台湾両国の保育実践者について、それぞれ5因子が抽出された。なお、両群における各因子の因子負荷量（0.40以上）は、表3、表4に示したとおりである。

次に、両群の各因子について、その特徴を探り、命名を行った。

まず、日本の保育実践者における5つの因子について述べる。

第1因子については、項目No.20「読む速度は速くなり過ぎないように留意する」、項目No.22「明瞭な発音で読み聞かせる」、項目No.21「話の内容や流れによって、その読む速度・めくる速度に変化を持たせる」などの項目により、「読み方・語り聞かせ方」の因子と命名した。

第2因子については、項目No.13「時々、子どもにまなざしを向けながら、読み聞かせる」、項目No.15「子どもの表情の動きに気を配りながら、読み聞かせる」などの項目により、「聞いている子どもへの配慮」の因子と命名した。

第3因子については、項目No.8「絵本の位置は、肩から胸のあたりにする」、項目No.10「ページをめくる時は、手や指で隠さないように注意する」、項目No.11「絵本の開きぐせをつけておく」などの項目により、「絵本の持ち方・見せ方」の因子と命名した。

第4因子については、項目No.30「読み聞かせ中の子どもの語りかけには、しっかりと応答してあげる」、項目No.31「物語に関連づけられた幼児の発言を大切にする」などの項目より、「子どもの発言への対応」の因子と命名した。

第5因子については、項目No.18「字のないページが出てきた時には、つなぎとして話しかけを行う」、項目No.28「物語絵本を読み聞かせの途中、質問をはさんで物語の流れを中断しないようにする」などの項目により、「質問・話しかけ」の因子と命名した。

次に台湾の保育実践者における5つの因子について述べる。

第1因子については、項目No.13「時々、子どもにまなざしを向けながら読み聞かせる」、項目No.14「自然な気持ちで読み聞かせる」などの項目により、「効果的音読」の因子と命名した。第2因子については、項目No.7「ページをめくる時に、読み聞かせがプツンと切れないように気をつける」、項目No.9「絵本がぐらつかないように、常に安定した持ち方をする」などの項目により「絵本提示」の因子と命名した。

第3因子については、項目No.1「文は、子どもの年齢や発達に合った絵本を選んで読み聞

表3．絵本の望ましい読み聞かせ条件についての因子負荷量（日本）

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
20	0.6890					0.5876
24	0.6426					0.5174
22	0.6317					0.5611
23	0.6276					0.5167
26	0.5196					0.5560
9	0.4954					0.5121
21	0.4709					0.4988
13		0.6763				0.4956
15		0.6536				0.4933
7		0.4984				0.3825
12		0.4609				0.3860
1		0.4607				0.2377
3		0.4549				0.2419
16		0.4050				0.3635
8			0.7226			0.5284
10			0.6678			0.6467
11			0.6646			0.4830
30				0.8015		0.6905
31				0.6320		0.6398
27				0.4590		0.2890
6				0.4484		0.3380
19				0.4469		0.3276
29					0.5909	0.4425
18					−0.4916	0.5943
25					0.4910	0.2819
28					0.4875	0.4231
寄与率	10.9800	9.4800	9.1600	6.7000	6.5900	42.9100

第1因子：読み方・語り聞かせ方　第2因子：聞いている子どもへの配慮
第3因子：絵本の持ち方・見せ方　第4因子：子どもへの発言への対応
第5因子：質問・話しかけ

（注）因子負荷量は、煩雑さをさけるために、0.40以上を記載した。

表4．絵本の望ましい読み聞かせ条件についての因子負荷量（台湾）

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
26	0.7020					0.7089
28	0.6794					0.6056
20	0.6449					0.5638
15	0.6442					0.6612
27	0.6363					0.4973
25	0.6142					0.6138
18	0.6042					0.5156
21	0.5969					0.4893
14	0.5941					0.5725
9		−0.8400				0.7584
11		−0.7025				0.6696
10		−0.6458				0.6737
8		−0.5489				0.5616
7		−0.4574				0.5933
24		−0.4316				0.5442
3			−0.7049			0.6124
1			−0.6081			0.5000
4			−0.5428			0.5945
2			−0.5089			0.4472
12			−0.4084			0.6212
16				0.6999		0.7605
5				0.5806		0.6163
6				0.5687		0.5257
29					0.7227	0.6096
17					0.5768	0.3614
30					0.5247	0.6652
寄与率	20.6022	12.8700	10.4635	7.6203	6.5903	58.1463

第1因子：効果的音読　第2因子：絵本提示
第3因子：環境構成　第4因子：集中
第5因子：感動

（注）因子負荷量は、煩雑さをさけるために、0.40以上を記載した。

かせる」、項目 No. 2 「子ども達が絵本を読んでもらうという気持ちになれるような環境を整える」、項目 No. 3 「読み聞かせの内容に期待や緊張感をもたせるようにする」などの項目により「環境構成」の因子と命名した。

第4因子については、項目 No. 5 「子どもの気持ちを散らす事物や音のない部屋を選ぶ」、項目 No. 6 「絵は、子どもの気がすむまで見せる」、項目 No. 16「子どもに語りかけるように読み聞かせる」などの項目により「集中」の因子と命名した。

第5因子について、項目 No. 17「良い役者になったつもりで読み聞かせる」、項目 No. 30「読み聞かせ中の子どもの語りかけには、しっかりと応答してあげる」などの項目により「感動」の因子と命名した。

そこで、次に、日本と台湾の保育者について、両者の因子名や項目の比較を行う。日本と台湾の双方で全く同じに命名された因子は認められなかったが、命名が類似している因子が2種類ある。それらは、(a) 日本の（第1因子）「読み方・語り聞かせ方」の因子と台湾の（第1因子）「効果的音読」の因子、(b) 日本の（第3因子）「絵本の持ち方・見せ方」の因子と台湾の（第2因子）「絵本提示」の因子である。(a) の因子のうち、双方で共通している項目は、No. 20、21、22、23、26 の5つである。具体的に言えば、適切な速度で読む、明瞭な発音で読む、適度の間をとって読む、声色を使って「せりふ」を読むなどの項目である。これらは絵本の望ましい読み聞かせに要求される音声学上の重要な留意点であるところに特徴がある。次に、(b) の因子のうち、台湾と日本で共通している項目は、No. 8、10、11 の3つである。具体的に言えば、絵本を持って見せる時の位置は肩から胸の辺にする、ページをめくる時に絵を手や指で隠さない、本は十分に開きぐせをつけておくなどの項目である。これらは、絵本の望ましい読み聞かせ条件のうち、特に絵本の保持、絵の提示、絵の明示に関する項目である。

上記の他に、日本では「聞いている子どもへの配慮」、「子どもの発言への対応」、「質問・話しかけ」が台湾では「感動」、「集中」、「環境構成」が独自の因子である。このように、台湾と日本の保育者で比較した場合には、共通した因子もあるが、むしろ相互に異なった因子のほうが多い。これは、同じ保育者でも台湾と日本では、望ましいとする絵本の読み聞かせ条件がかなり異なっていることを示唆している。

以上、絵本の望ましい読み聞かせ条件に関する因子名とそれらを構成する具体的項目を、日本と台湾の保育者について比較してみたところ、因子名が類似し、それを構成する項目も共通しているものが2組あった以外は、項目に共通したものがなく、全く別の因子に分類されるものが多かった。

このような結果が得られたのは、抽出された因子に共通性が乏しく、命名を行っても、その名称が必ずしも各因子の全体的特徴を象徴的に的確に表していないためだと考えられる。また、本研究の調査項目は、基本的には国語教育の書物や教育実践書から「絵本の望ましい読み聞かせ」の条件とされていることがらを収集し、それらの文章表現をほとんどそのまま使用した。それゆえ、これらの項目を中国語に翻訳する際の訳出の困難さ、同じ問いに対する両国における風俗習慣の相違からくる文章理解の微妙なずれなど、さまざまな要因が関与していると思われる。

2．項目別の検討

次に各項目について、調査対象によってどのような差異が認められるかを調べてみた。

まず、表5には日本と台湾における対象者別の高評定値項目（上位より各5項目）を示した。この表から日本と台湾の保育者で共通しているものが、5項目中3項目ある点に注目したい。そ

表5．両国における評定値の高い項目

保育実践者	
日　本	台　湾
1	22
13	1
15	14
31	13
22	18

表6．両国における評定値の低い項目

保育実践者	
日　本	台　湾
17	17
18	6
11	29
8	11
6	24

れらを具体的にあげると、「文は、子どもの年齢や発達に合った絵本を選んで読み聞かせる」(No. 1)、「時々、子どもにまなざしを向けながら読み聞かせる」(No. 13)、「明瞭な発音で読み聞かせる」(No. 22) である。すなわち、台湾の保育者、日本の保育者が、ともに最も重視している絵本の望ましい条件として、①子どもの発達や興味に合った絵本を選ぶこと、②読み聞かせの途中、子どもたちに共感のまなざしを向けること、③明瞭な発音で読み聞かせることが明らかにされた。これらは、絵本を読み聞かせる場合、保育者として基本的に配慮すべき最も重要なことがらとして選ばれた項目と言えよう。他の両国で共通でない項目をみると、日本の保育者は聞いている子どもたちへの配慮を重視しているのに対し、台湾の保育者は読み聞かせの技法的な面を重視している点に両者の特徴が表れている。

次に、表6には、日本と台湾における対象者別の低評定値項目（下位より各5項目）を示した。この表から、日本と台湾の保育者で共通しているものが3項目ある。具体的にあげると、「絵は、子どもの気がすむまでみせる」(No. 6)、「絵本の開きぐせが悪くならないように、十分に絵本の開きぐせをつける」(No. 11)、「良い役者になったつもりで読み聞かせる」(No. 17)、の3項目である。本論文の最初でも述べたように、絵本の読み聞かせ中、子どもに絵を見せることは不可欠な要素である。しかし、「子どもの気がすむまで」見せる必要はない、と両国の保育者たちは考えているのであろう。同様に「絵本の開きぐせをつける」や「役者になったつもりで読む」なども、さほど重要な条件とは考えられていないことがわかる。このほかでは、台湾の保育者が、No. 24の「文中の言葉の説明ばかりしないようにする」と、No. 29の「子ども自身の感動を大切にし、読後、むやみに感想を聞かない」を低く評価していることが目立つ。これらの項目は、日本の保育者では、No. 24が第15位、No. 29が第13位で、それほど低い評価を受けているわけではない。日本と違って台湾では、絵本を読み聞かせた後、母親や保育者は、子どもたちに「知道了麼?」(「わかりましたか?」) と聞くことが多い、このような習慣があるので「読後に感想を聞かない」という項目は、台湾の保育者から低い評価を受けたと考えられる、また、台湾では、絵本を読み聞かせる時に、文中の言葉の説明をすることが少なくない。このような自国の習慣に照らしてみた結果、「言葉の説明をしない」ことも低い評価を受けたのかもしれない。

以上、本研究の結果をもとに、絵本の望ましい読み聞かせに関する因子構造、項目ごとの評定値などについて考察を行ってみたところ、日本と台湾の保育者間に共通した特徴や異なった点が見い出された。中村（1991）は絵本の読み聞かせに関するこの種の心理学的研究は、日本でもほとんど行われていないことを指摘しているが、台湾でも全く同様のようである。本研究では、調査項目の選定、因子の抽出の仕方、結果の分析方法など、改善すべき点がいくつか認められたが、本研究によって、絵本の読み聞かせに関する国際比較研究が行われ、そこから新しい知見が得ら

れたことの意義を強調したい。

要　　約

本研究の目的は、日本と台湾の保育者を対象に、絵本の望ましい読み聞かせの条件について調査し、その結果を相互に比較することであった。

対象者は、日本では、大阪府・京都府・奈良県の幼稚園・保育所の保育者100名、台湾では、中華民國台湾省台南市の幼稚園・保育所の保育者100名　計200名であった。調査用紙は、日本では中村（1991）の「絵本の望ましい読み聞かせ方法」に関する質問項目（31項目）を使用し、台湾では、これを中国語（北京語）に翻訳したものを使用した。調査は各幼稚園・保育所で調査用紙に個別に記入してもらい、これを回収した。

得られた資料をもとに国別に因子分析を行い、それぞれ5つの因子を抽出し、命名を行った。

両国における調査の比較から得られた主な結果は以下のとおりである。

(1)　絵本の望ましい読み聞かせ条件に関する因子名とそれらを構成する具体的項目（負荷量0.40以上）を比較してみたところ、因子名が類似し、それを構成する項目も共通しているものが2組あった以外、全く別の因子に分類されるものが多かった。

(2)　各項目ごとの評価について、両国の調査対象によってどのような差異が認められるかを調べてみたところ、台湾と日本の保育者が、ともに最も重視している絵本の望ましい条件は、①子どもの発達や興味に合った絵本を選ぶこと、②読み聞かせの途中、子供たちに共感のまなざしを向けること、③明瞭な発音で読み聞かせることであった。

一方、台湾と日本の保育者で共通して低い評定をされた項目は、「子どもの気がすむまで絵を見せる」、「開きぐせをつける」、「役者になったつもりで読む」であった。

引　用　文　献

赤羽末吉　1986　子どもの絵本をみつめる—画家として—　日本子どもの本研究会編　子どもの　本の学校　ほるぷ出版

秦　栄華　1992　興幼児分享讀書樂　學前教育月刊　10月　22－24.

本田和子　1980　絵本　村山貞男監修　幼児保育学辞典　明治図書　91.

許　興仁　1981　教材教法—国語文　聾書森編述　光華女子高級中学附設女子高中進修補校印行

漢那憲治　1979　読み聞かせの効果（Ⅰ）—読書力におよぼす読み聞かせの効果についての一考察—　読書科学，22，95－104.

松居　直　1973　絵本とは何か　日本エディタースクール出版部

中村年江　1991　絵本の読み聞かせに関する心理学的研究—絵本の読み聞かせに関する変数と望ましい読み聞かせ条件の検討—　読書科学，35，4，149－159.

阪本敬彦　1974　絵本　内山喜久雄監修　児童臨床心理学事典　岩崎学術出版社　48.

佐々木宏子　1975　絵本と想像性　高文堂出版

佐々木宏子 1990　増補絵本と想像性　高文堂出版

任　晟蓀　1985　談封幼児説故事之重要性及方法　國教之聲　19巻　1期　9－11.

黄　美湄　1991　別把「親子共読」當功課　學前教育月刊　3月　8－9.

呉幸玲　1990　童話的魅力　學前教育月刊　5月　16－17.

山本道子　1990　読み聞かせと想像・表現　日本保育学会第43回大会研究論文集，536－537.

依田逸夫　1982　読み聞かせの意味と方法　高橋太郎・本間繁輝・古藤洋太郎・依田逸夫　入門期の国語教室　221－290　日本書籍
幼児言語研究会　1977　幼児のことば教育入門　一光社

付　記

本研究において、調査の実施やデータの統計分析等に協力してくださった次の方々に心から感謝します。

日本：近畿地区（大阪府・京都府・奈良県）の幼稚園・保育所の先生方、奈良教育大学心理学専攻生　田中秀明君。

台湾：台南市光華女子高級中学の許興仁校長先生・邱琡雅先生・孫秋香先生、台南市内の幼稚園・保育所の先生方、その他黄雅倫さん。

A Comparative Study on Opinions about Methods of Reading Picture Books in Japan and Taiwan

Yasuchika IMAI, Hsiao Hui LIAO
(*Department of Psychology, Nara University of Education, Nara* 630, *Japan*)

and

Toshie NAKAMURA
(*Faculty of literature, Kobe Women's University, Hyogo* 654, *Japan*)

(Received April 31, 1993)

Purpose

The purpose of this study was to investigate what teachers thought were good methods of reading picture books to young children and to compare the results in Japan with those in Taiwan.

Method

(1) Subjects: 100 Japanese kindergarten and nursery school teachers in Osaka, Kyoto and Nara, and 100 Taiwanese kindergarten and nursery school teachers in Tainan. (2) Material: A questionnaire with 31 items described techniques that may be used in reading picture books to young children. (3) Procedure: Subjects were asked to rate the importance of each item on a scale of one to five.

Results

(1) On the basis of the data from the questionnaire, a factor analysis isolated five categories of items which were considered important in picture book reading in both Japan and Taiwan: In Japan, the categories were: No. 1, Story-telling/reading style; No. 2, Concerns to children as listeners; No. 3, Ways of holding the story book and showing it to the children; No. 4, Reactions to children's comment and exclamations; and No. 5, Questions and discussions. In Taiwan, the categories were: No. 1, Effective reading; No. 2, Stimulating children's interest; No. 3, Presentation of the picture book; No. 4, Creation of pleasant environments for reading; and No. 5, keeping children's attention. (2) The five items which were thought to be the most important by teachers were identified. Among them 3 items which were common in both Japan and Taiwan, were as follows: The selection and reading of picture books suited to the children's ages and development, Looking at the children from time to time while reading the picture book, and Reading with good, clear articulation. (3) The five items which were not considered to be vitally important by teachers were identified. Among them 3 items which were common in both Japan and Taiwan were as follows: Showing the picture for as long as the child remains interested, Taking care to encourage the habit of opening up picture books, and Trying to read like an accomplished actor.